

論文名：在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス

－ 測定尺度の開発と関連要因の検討 － (要約)

新潟大学大学院保健学研究科 (論文博士は氏名のみでも可)

氏名 田中 美央

---

## 1. 背景

近年の医療の進歩により、実用化された様々な医療技術を用いて、在宅で生活をおくる重度障がい児・者が増加しており、その支援が国内外において喫緊の課題となっている。子どもは、長期に濃厚な医療的ケアを必要とするため、医療・教育・福祉の連携による地域包括ケアの体制づくりが求められる。在宅生活においては、そのケアを担う親のウェルビーイングが重要である。親が困難な状況に柔軟に対処する要素の一つに親のレジリエンスが報告されているが、在宅重度障がい児・者の親の研究は散見される程度である。既存のレジリエンス尺度では捉えられない、対象の背景や固有の問題に対応したレジリエンス尺度を作成することにより、臨床的に活用可能な新たな知見が得られると考えた。

## 2. 目的

本研究では、在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検討するとともに、親のレジリエンスの関連要因を明らかにし、効果的な支援のための基礎資料とすることを目的とした。

**研究1:** 在宅重度障がい児・者の親の内的的支え体験とレジリエンスの構成要素を明らかにし、文献検討の結果と合わせて、親のレジリエンス概念モデルを生成する。

**研究2:** 「在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度」を作成し、信頼性と妥当性の検証を行う。

**研究3:** 親のレジリエンスの関連要因を検討し、多職種で共有できるツールとしての活用の検討する。

## 3. 方法

**研究1:** 在宅重度障がい児・者の親の内的的支え体験とレジリエンスの構成要素を明らかにするために、親へのインタビューデータを質的に分析した。手法は内容分析を用いた。得られた結果と文献検討から、本研究の全体の概念枠組みを作成した。

**研究2:** 研究1の結果より、重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度暫定37項目を作成し、在宅重度障がい児・者の親を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。測定用具は、親のレジリエンス尺度(本研究で開発)、親のウェルビーイング(改訂いきいき尺度の満足感とチャレンジ精神)、対人的支えへの認識(自作)、子どもの状態(超重症児スコア)を用いた。分析は、天井効果と床効果を検討し、探索的因子分析(最尤法プ

ロマックス回転)を行った。また、妥当性と信頼性の検討を行った。

**研究3**：研究2で作成した「重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度」の因子的妥当性を検証するため、無記名自記式質問紙調査を行い、確認的因子分析を実施した。また、レジリエンスに関連する要因を明らかにするため、基本属性、親のウェルビーイングの状態、親のサポート認知との関連を検討した。分析方法は、ピアソンの相関係数の算出、t検定および一元配置分散分析およびTukey法による多重比較、重回帰分析を用いた。解析は統計ソフトSPSS.22およびAMOS25 for Windowsを使用し、有意水準は両側5%とした。

#### 4. 倫理的配慮

新潟大学における「人を対象とする研究等倫理審査委員会」の承認を得て実施した(2017年9月22日, 承認番号2017-0144)

#### 5. 結果

**研究1**；研究1-1は、在宅重度障がい児・者の母親12名を対象に、子どもの反応に関する母親の内面的支え体験から6つの体験を明らかにした。レジリエンスの側面につながる概念が明らかになったことで、実際の活用時に親の状況を考慮する状況への示唆が得られた。研究1-2では、親のレジリエンスの構成要素を明らかにするため、Mastenの提唱している個人的資源と環境資源の構成概念をもとに、データの分析を行った。その結果、個人的資源として①育児スキル、②親としての意識、③育児への見通し・希望・期待、④対人的支えの4点、環境資源として⑤援助要請力、⑥感情調整力の2点のテーマに分類された。文献検討の結果と合わせ、本研究の概念枠組みを作成した。

**研究2**；関東甲信越地域の477名の親に在宅重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度(暫定37項目)を含む自記式質問紙表を配布し、郵送法にて229部(回収率48.0%)回収し、193名(有効回答率84.3%)を分析対象とした。回答者は母親94.8%であり、子どもの平均年齢17.5±8.4歳であった。重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度は、[子どもに対する理解と気づき][子ども自身からのエンパワメント][専門職の活用][子ども以外の興味関心][感情調整][子どもと家族の生活の安定][援助要請]の7因子28項目からなる尺度となった。各下位尺度の $\alpha$ 係数は0.7以上であった。各下位尺度は親のウェルビーイング(「満足度」,「チャレンジ精神」)と有意な正の相関を認めた。以上のことから、信頼性と妥当性を確認できた。

**研究3**；全国の599名の親を対象に自記式質問紙調査を実施し、郵送法にて342部(回収率57.1%)が回収され、324名(有効回答94.7%)を分析対象とした。対象は、母親93.8%、子どもの平均年齢17.7±8.7歳であった。研究2で開発した尺度項目について確認的因子分析を行い、適合度指標は $\chi^2=633.949$ ,  $df=329$ ,  $p<.001$ ,  $GFI=.881$ ,  $AGFI=.853$ ,  $RMSEA=.053$ ,  $AIC=787.949$ ,  $CFI=0.922$ でデータに適合した結果が得られた。重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度と属性の多群比較によると親の年代別では「子ども自身からのエンパワメント」は50歳代が、30歳代より、また「専門職の活用」は40・50歳代が60歳以上群より有

意に高かった。一方、各下位尺度とサポート5領域はいずれも有意な正の相関を示した。特に、中程度の相関 ( $r=.40$ 以上) を示したのは、周囲・仲間サポートと「子どもと家族の生活の安定」以外の下位尺度であった。重回帰分析の結果からは、周囲サポート、専門職サポート、配偶者サポート、親の就労、通園・療育センター利用経験、日常的に関わる職種（訪問看護師、病棟看護師、教師）が、親のレジリエンス下位尺度得点に関連していた。また、各下位尺度の関連要因は異なっていた。

## 6. 考察

本研究で開発した、重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度は、7つの下位尺度から構成され、確認的因子分析の結果から適用可能な尺度と考えられた。また、親のレジリエンスを支援するためには、親と子どもの年齢や親の就労、子どもの重症度を考慮する必要があること、周囲サポート、専門職サポート、配偶者サポートが効果的に発揮される領域を理解して支援すること、また日常的に関わる職種の役割を發揮できるように支援体制を構築することの必要性が示唆された。今後、本尺度を用いてレジリエンスを7つの視点からアセスメントすることで、対象がどのような資源や要素をもっているのか、レジリエンスのどの特徴を活かしているのを総合的に把握することが可能になると考えられた。今後、多職種での活用ツールとして、有効な支援に繋げることが期待される。

## 7. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、無作為抽出を行っていない調査であり、今後異なった地域において本尺度の安定性について検証していく必要がある。また、対象者が社会資源や親の会を利用しているため、比較的適応している親であるという点や、母親が95%という点で偏りが存在する可能性がある。今後全国調査を実施し、より詳細な基礎的データを重ねていく予定である。また、研究デザインが横断調査のため、因果関係については明らかになっていない点は、今後の課題である。

## 8. 結論

重度障がい児・者の親のレジリエンス尺度は、7つの下位尺度から構成され、適応可能な尺度と考えられた。レジリエンスの下位尺度ごとに関連要因が異なっており、親の就労、通園・療育センター利用経験、周囲・仲間サポート、専門職サポート、配偶者サポート、日常的に関わる職種（訪問看護師、病棟看護師、教師）の要因が、親のレジリエンスに関連していた。よって、仲間との出会いの機会の提供、発達段階に応じた親子の関係づくりへの支援、専門職としての効果的役割が發揮できるように支援につなげて行くことが必要である。小児医療における地域包括ケアの展開のためのツールとしての活用が期待される。